



「ラウンドシステム」の導入により、子どもと向き合う授業を推進

埼玉県熊谷市教育委員会 教育長

野原 晃 のはら・あきら

埼玉大学教育学部卒業。埼玉県上尾市立上尾中学校教諭を皮切りに、埼玉県教育局の指導主事や教育事務所所長、熊谷市内の中学校校長などを歴任し、2005年12月から現職。同県都市教育長協議会顧問。

熊谷市プロフィール

埼玉県北部に位置し、南に荒川、北に利根川と自然に恵まれた、人口約20万人の都市。2019年にはラグビーワールドカップが熊谷ラグビー場で開催される予定で、「おもてなしの心」で迎えようと、現在準備を進めている。

グローバル化が進展する中、多様な他者と交流できるよう、英語を用いた真のコミュニケーション能力の育成が切実な課題となっています。本市でも、2019年のラグビーワールドカップの開催を控え、訪日外国人を温かく迎えたいという思いから、真のコミュニケーション能力を備えた国際人の育成に力を入れています。

その一環として、2014年度に、研究指定校の英語の授業に「ラウンドシステム」を試験的に導入しました。これは、教科書を何回も繰り返し使いながら、生徒がコミュニケーション活動に取り組むことで、英語4技能の総合的な定着を目指す学習法です。研究指定校では、授業を視察した教育関係者が「これほど生徒がいっぱい話している授業は初めて見た」と目を見張るほど授業に活気が生まれ、英語の外部検定試験のスコアも、2～3年生にかけて他校より平均で30ポイント前後も高く伸びました。2016年度からは、市内全中学校でこのシステムを取り入れています。

ラウンドシステムは形だけ真似てもうまくいきません。まず、子どもの伸びを意識した評価が重要です。最初は間違ってもよいから、とにかく繰り返して上達すればよいのだと伝えるようお願いしています。また、教員の生徒へのかかわり方が一層重要になります。教員と生徒、生徒同士が「かまひ合う」「向き合う」授業の実現によって言語活動が充実し、真のコミュニケーション能力の育成につながるからです。「子どもと向き

合う時間がない」という声をよく耳にしますが、授業こそが子どもと向き合う大切な時間なのです。

今後は保護者への成果の見える化を図るため、高校入試への対応力を高めていきたいと考えています。埼玉県の進学校で頻出の長文問題に対しては、ラウンドシステムによって量に負けない英語力が育ちつつありますが、さらなる向上を目指し、今後はグレイデッド・リーダーズなどの多読用教材も活用する予定です。

近未来への布石 ラウンドシステム

ストーリー性のある英語の教科書を選び、それを1年生では5回、2・3年生では4回繰り返す。言語習得の自然な流れを重視し、単語や文法などはラウンドがある程度進行してから整理する。

ラウンド(※1)	目標	主な活動
1	概要理解	教科書本文の音声と、ヒントとなるピクチャーカードのみで、教科書本文の概要を理解する。
2	音と文字の一致(※2)	音声を聞きながら教科書の英文を追い、音と文字を一致させる。
3	発音の習得	教科書を音読し、その英文をノートに写す(転写)。
4	文構造の習得	教科書の英文に設けられた空欄を埋めながら音読し(穴あきリーディング)、ノートに英文を書いていく。
5	自分の言葉で表現	教科書の内容を自分の言葉で伝え(ストーリーテリング)、その英文をノートに書いて、オリジナルテキストを作成。

※1 2～3か月かけて各ラウンドを終える。 ※2 1年生のみ。2・3年生では「発音の習得」が第2ラウンドとなる。

*熊谷市教育委員会提供資料を基に編集部で作成。